

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人

チェルノブイリ医療支援ネットワーク

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前3-6-1小森ビル4A

TEL/FAX : 092-260-3989

E-mail : jimu@cher9.org

チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

141

特集 被ばく量を測る

CONTENTS

原発事故の大きさは被ばくのリスクの大きさ / 2025年秋 福島訪問レポート / 大学生からの福島訪問報告 / 2026年度通常総会のご案内 / 理事長逝去のご報告 / 写真から福島の今を知る(6) / 福島訪問を振り返る(5) / 古本募金 きしゃぼんのご紹介とお礼 / 支援者のお名前とメッセージ



ベラルーシで出会った子どもたち

(撮影：中筋純 撮影場所：ピンスク市オスネジッキー村)



オンライン版への
アクセスはこちらから

＊環境負荷軽減および経費削減のため
ペーパーレス化を進めています。

本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行

記号 17460 番号 52319621

他の金融機関からは 七四八支店 (普) 5231962

楽天銀行

ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104

住信SBIネット銀行

法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416

※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

原発事故の大きさは被ばくのリスクの大きさ

寄稿／伊藤 延由

縁

あつて2009年11月から飯舘村に住み、2010年4月から研修施設の管理人の傍ら水田約2.2ha、畑約1.0haの耕作を始めました。

2010年はそれまでの人生にない充実した一年間でした、同年は平場では高温障害でコメの品質は悪いものでしたが、飯舘村小宮地区は標高400から500メートルで高温障害もなく質のよいコメが採れました。日本の農業取り分けて中山間地と言われる地域は、獣害と雑草との戦いです。水田・畑の周りに、獣害対策の為の電気柵を張り巡らし、雑草が漏電を起こさぬよう電気柵の下の子刈りは大きな負担でした。2.2haの電気柵の下の子刈りが一回りすると、最初の部分は草が伸びて草刈りが必要な状態でした。

田植えが終わった5月中旬からは日の出とともに草刈り、朝食後一休みして草刈

り、夕食を取ると眠気が襲い爆睡でした。現在の体重は70kgほどですが当時は62kg程度でした。畑にはいろいろな野菜を植えましたが、樹上完熟のトマトや野沢菜の若芽のシャブシャブなど生産者でなければ味わえないものがふんだんに得られました。

トウモロコシも植えたのですが、無農薬でほとんどが虫食いで売り物にならず、一時は主食がトウモロコシの時期がありました。採れたて茹でたてのトウモロコシは美味しく毎日頂きました。

丹精込めた作物の収穫は農民をして良かったことを実感しました、コメは約8トンの収量で、社員やお客様に試食をお願いし、宜しかったら購入をとご案内したところ、同年末までに完売しました。コメは主食ですから通年供給できなければと、周辺の休耕田を借り、2011年は約6.0ha、25トンの収穫を目論み準備を始めた矢先でした。



初秋の飯舘村 2025年



発災

3月11日午後、未曾有の大震災が襲った、飯館村も震度6強の揺れでしたが村内での家屋倒壊はゼロ、屋根の瓦がズレたとか玄関の戸が開きにくくなった程度でした。

飯館村の災いは3月15日夕方から始まり、14日午後それまで村内にはなかったモニタリングポスト(MP)が設置されました。

そして翌15日夕刻(18時20分頃)にMPの値は毎時44・7マイクロシーベルト($\mu\text{Sv/h}$)を示しました。通常この値は0・04～0・05 $\mu\text{Sv/h}$

hですから通常の千倍ほどの値になります。ただ、放射能は匂いも、色も五感に感じないもので直ちに健康に害をもたらすものではないのです。

避難指示

国は4月22日に至り、年間被ばく量が20 μSv ないし50 μSv を超える可能性があると、飯館村に計画的避難区域を指定、一か月以内に村外に避難せよと指示しました。

実際に避難が終わったのは7月上旬の仮設住宅完成の時期でした。



晩秋の飯館村 山の恵みたち 2014年

除染

原発事故で放出された放射性物質は広島原爆の168発分と言われていますが、その7～8割は海洋に、残りが陸上に降下し動植物を汚染しました。その結果、事故前までは毎時0・04～0・05 $\mu\text{Sv/h}$ 程度だった空間線量率が飛躍的に高まりました。

事故直後1～2年くらいは10 $\mu\text{Sv/h}$ 程度(事故前の200倍ほど)の場所が随所にありました。雨樋の下などは350 $\mu\text{Sv/h}$ ほどの場所がありました。国は放射線量を下げするために除染と称して、宅地、農地、道路とそれぞれの境界から20メートルの範囲を対象に宅地、農地は表土5センチメートルを剥ぎ取り清浄な土を5センチメートル覆土し、道路は高圧洗浄し最終的には再舗装を施しました。しかし、除染の範囲は飯館村の場合面積の16%で、残る84%の山林原野は手つかずで問題を残しています。

飯館村の除染に投じられた費用は4千億円(2024年度末)と言われていますが、その額は、2010年の村の予算41億円の約100年分です、しかし除染の効果も限定的で除染後8年を経過し自然の営みにより汚染が進むケースがみ

られます。未除染の山林原野では14年を経た現在でも1.0 $\mu\text{Sv/h}$ (事故前の20倍)を超える線量率を示します。

放射線防護の三原則

放射線が発見されて以来、放射線には何らかの害があることから「放射線防護」なる言葉が存在しています、そこには、

1. 正当化(Justification)

放射線を使用する行為は、それによって得られる便益が、被ばくによる不利益を上回る場合にのみ正当化されるべきであるという原則です。例えば、医療における放射線診断や治療は、患者の健康状態を改善するという便益があるために正当化されます。

2. 最適化(Optimization)

放射線による被ばくは、経済的・社会的要因を考慮に入れながら、合理的に達成できる限り低く抑えるべきであるという原則です。これはALARAの原則(As Low As Reasonably Achievable)としても知られています。

3. 線量限度(Dose Limits)

放射線業務従事者や一般公衆が受ける放射

線量には、上限が設けられています。これは、放射線被ばくによる健康影響を制限するためのものです。

三つの項目とも共通するのは、如何に被ばくを低く抑えるかに配慮しています。即ち、放射線被ばくはいかなる場合でもリスクはあることの現れです。

自然界にも存在する放射線被ばく

とは言え、人類発生以来自然界から被ばくしています、下の表は日本人が自然界から受けている放射線被ばくの表です。外部被ばくの場合は宇宙線によるものと、地球の大地を構成する岩石などから発する被ばくがあります。大地放射線の中には、1950年代後半から始まった大気圏内核実験で放出された放射性物質の残渣からの被ばくも含まれます、60年以上

昔に行われたものが現在も消えずに残っている。

右下の表は日本人が自然界から被ばくする要素です、外部被ばく、内部被ばく(吸入摂取)、内部被ばく(経口摂取)に分かれ、概ね年間2.1 μSv を被ばくするとあります。

身の回りの放射線

自然からの被ばく線量の内訳 (日本人)

被ばくの種類	線源の内訳	実効線量 (ミリシーベルト/年)
外部被ばく	宇宙線	0.3
	大地放射線	0.33
内部被ばく (吸入摂取)	ラドン222 (屋内、屋外)	0.37
	ラドン220 (トロン) (屋内、屋外)	0.09
	喫煙 (鉛210、ポロニウム210等)	0.01
	その他 (ウラン等)	0.006
内部被ばく (経口摂取)	主に鉛210、ポロニウム210	0.80
	トリチウム	0.0000082
	炭素14	0.01
	カリウム40	0.18
合 計		2.1

以降の章では外部被ばくを中心に筆者の採取したデータを示します。この値は地域によりかなりの差異があります。

出典:(公財)原子力安全研究協会「生活環境放射線」(平成23年)

『飯館村初期被曝評価プロジェクト』による被ばく量

名前	2011年 月別被曝量、mSv					合計
	3月	4月	5月	6月	7月	
伊藤延由	4.0	1.9	1.7	1.6	1.3	10.5mSv

原発事故による被ばく量

1. 初期被ばく(外部)

左の表が示す値は、2012年秋に開始された「飯館村初期被曝評価プロジェクト」による、筆者の初期被ばくの評価値です。

このプロジェクトは京都大学複合原子力科学研究所(旧京大原子炉実験所)の今中助教が中心となり環境省の委託事業として実施されたものです。

対象範囲は3月15日夕刻から7月末まで4・5か月の推計被ばく量です。自然界からの外部被ばくが0・63mSvだと

すると、4・5か月で約17年分の被ばくをしたこととなります。ただ、この程度の被ばく量では「直ちに健康に被害をもたらす値ではない」ようです。これは原発から約35キロメートル離れた場所で過ごした値です。

避難指示解除後の被ばく量の変化

国は2017年3月末日をもって避難指示を解除(一部長泥地区を除く)しました。その時の条件が、年間20mSvで避難指示したが20mSvを下回ったので避難指示を解除するとしたものです。ご存知の通り福島県以外では一般公衆の追加被ばく量は年間1mSvと決められています。原発事故が起きると年間1mSvの基準は守れない、だから福島県民は年間20mSvとするとき

れました。放射線防護で述べましたが、被ばくはリスクがある、だから可能な限り被ばくを避けるとあります。その為に許される被ばく量は年間1mSvと決めたはずですが、福島県では年間20mSvが管理の基準になっています、これには怒りをもって抗議します。原発事故はそれまで安全のために決めた基準は守れない、だから基準を下げることにしました。

私は避難指示解除を受けて村に戻り生活を始めました、解除前も日中は村内での活動は制限されていませんでしたから、被ばくを承知の上で村内で生活していました。避難指示解除後は宿泊も可能となり村内宿泊をベースに生活しています。国が避難指示解除したエリアで生活するとどれくらいの被ばく量になるかを測りながら。

使用する測定機器と具体的測定

A. 空間線量計(PDR-111)

放射線の測定(ガイガーカウンター)

B. 個人被ばく線量計(PDM-122B)

個人の被ばく量測定、累積

C. 個人被ばく線量計(PDM-501)

個人の被ばく量測定、累積&時間毎の被ばく量



測定は、PDM-122Bを使い、毎朝6時から翌朝6時までの24時間の被ばく線量を採取し記録、その後ゼロクリアして翌日の測定に進む。

PDM-501は時間毎の被ばく量が採取出来るので、1時間毎の被ばく量を採取し、一か月間のデータを記録採取。

B、Cの測定器を腰高（1メートル）に装着、二基装着は万一の際のバックアップと、器機による誤差補正のためです。

避難指示解除後8年間の被ばく量

毎日の行動を、村内の屋内又は車内と屋外滞在時間、村外滞在に分けて集計しました。事故前では、屋内と屋外による差異はほとんど無いのが普通です、その事実は事故後の村外の測定値が示しています。（※下表参照）

時間の経過とともに被ばく量は少なくなる傾向です。それは、汚染源であるセシウムの構成により、降下時ほぼ50対50だったセシウム134と137ですが、半減期が約2年のセシウム134は2016の年で1／8に減衰しています。

8年間平均1.5mSv、2024年は1.2mSvと低い値ですが、①村内の屋外滞在時間が少ないこ

と、②村外滞在割合が多かったことにより。営農再開や林業再開で屋外滞在が増加すれば、3～5倍程に増加する事は間違いないと思います。ただこの程度の被ばく線量では先に述べたように、直ちに健康に害は無い値です。

飯舘村の被ばく量と全国各地の比較

次ページ上のグラフは、2024年6月～一年間、毎月1日の被ばく量を集計したものです、目的の一つは、飯舘村の被ばく量が抜きんでいることの証明、もう一つはもし事故が無い状態（平常時）の被ばく量を記録しておくことです。事故後の値を見て、これは原発事故の被害なのか否かを見分けるためには平時の値を記録しておくことが大切です。

飯舘村の値は明らかに原発事故の影響です、しかし同じ福島県内の南相馬市、福島市の値は影響の有無は判断できません。新潟市や村上市（新潟県）の値を下回っています。

このように放射線量は地域によって大きな差異があります、新潟市は私の自宅のある東区の測定結果ですが、事故直

後の測定ではセシウム134が検出されたので事故の影響も疑われます。

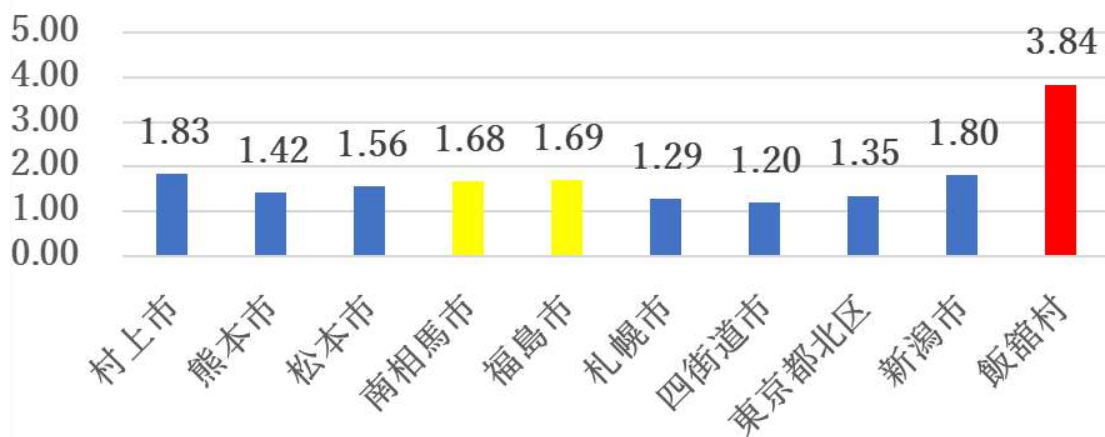
村上市は自然界から？、新潟県北地域で自然界の放射線が高いエリアが報告されていますし、

年	被ばく量 (mSv)	村内屋内		村内屋外		村外	
		時間	率	時間	率	時間	率
2017	1.8	5,439.5	62.1%	266.0	3.0%	3,054.5	34.9%
2018	1.6	5,568.5	63.6%	281.5	3.2%	2,910.0	33.2%
2019	1.5	6,110.5	69.8%	215.0	2.5%	2,434.5	27.8%
2020	1.6	7,078.0	80.6%	310.5	3.5%	1,395.5	15.9%
2021	1.6	6,768.0	77.3%	375.5	4.3%	1,616.5	18.5%
2022	1.4	6,655.5	76.0%	445.5	5.1%	1,659.0	18.9%
2023	1.4	6,587.5	75.2%	504.5	5.8%	1,668.0	19.0%
2024	1.2	5,913.0	67.3%	406.0	4.6%	2,465.0	28.1%
計	12.1	50,120.5	71.5%	2,804.5	4.0%	17,203.0	24.5%

* 2017年1月1日～3月31日は解除前

地区別被ばく量グラフ

(年間平均、単位: μSv)



村上市内の瀬波温泉も測定範囲に入っているのでラドンなどの影響もあるようです。

こんなこともありましたが、2016年9月1日から今日まで一日も欠かさずにこの測定(PDM-122B)を続けてきました。2024年2月に入院した新潟市内の病院では一日の被ばく量が2.0^{グイ}Svの日が続きました。原因は建設資材、砂利など自然由来と思われます。

これからも被ばく量を測定していきますが、ここで気づいた事「被ばくしてしまった量を測っても手遅れ」だということです。

特に放射線の感受性が大人の20倍とも言われている子どもたちの被ばくを避けるために大人は苦心すべきです。

終わりに

起きないと言われていた原発事故が起きた、国会で全電源喪失は無いと発言した首相がいましたが、全電源喪失し重大事故に至りました。原発事故からの復旧は困難です、それは、山林原野は未除染のままからです。飯舘村の場合は未除染のエリアが村の面積の84%で、土壌は数万ベクレル/kgのまま、200〜300年放

射線を出し続け、山菜茸を汚染し続けます。

国は放射線防護の三原則に従い国民を放射線被ばくから隔離する策を講ずるべきですが、その様子は見られません。

であれば自らが放射線防護を学び自らと家族の身を守る事にしましょう。



いとう のぶよし

伊藤 延由 / 飯舘村農民見習い

1943年 11月生まれ

2010年 飯舘村の農業研修所「いいたてふあーむ」の管理人に就く。
管理人の傍ら、水田・畑を耕作。

2011年 2年目の準備を目前に被災。

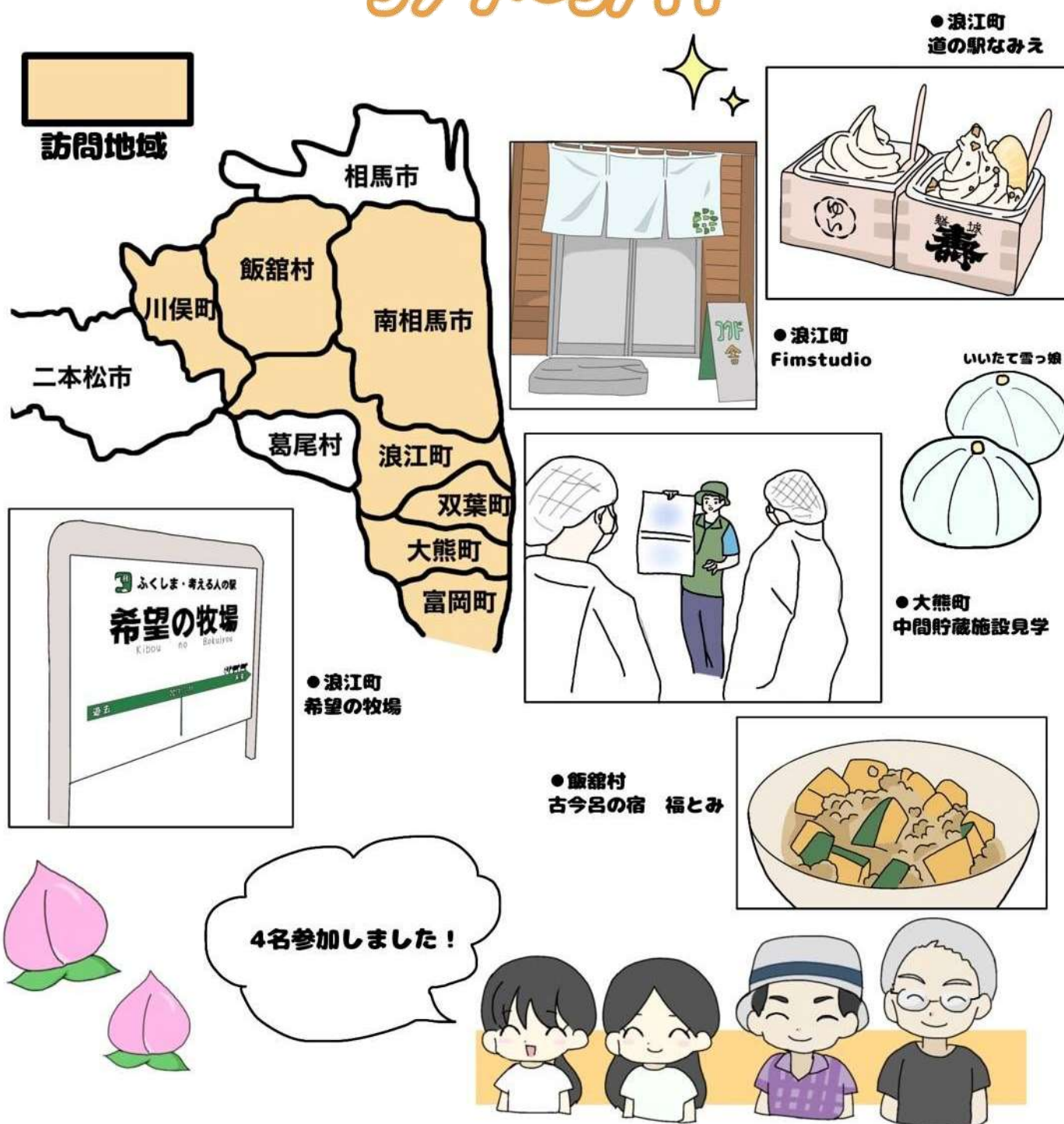
6月末福島市内へ避難。11月「飯舘村新天地を求める会」を立ち上げ活動。

2025年秋 福島訪問レポート

2025年9月7日～9月11日の福島訪問参加者のレポートです。

訪問を通して知ったことや考えたこと、感じたことについて報告していただきました。

福島訪問2025 9/7～9/11



2025年秋福島訪問

中田青来（大学4年）

仮設住宅を再利用した

新たなコミュニティスペース

今回の福島訪問では5日間を通して、多くの方から様々なお話をお聞きしました。

1日目は浪江町建築設計事務所「Fimstudio」の渡部さんから、実施している活動などについて教えていただきました。渡部さんは仮設



Fimstudio 渡部さん

住宅を再利用してSTUDIO B-6を設立さ

れました。ここでは、スタジオ、シェアキッチン、カフェ、書店が一緒になっており度々イベントやワークショップが開催されるそうです。スタジオ設立に際しても、ワークショップという形で多くの方々とともに作られたそうですが、コロナ禍でもあったため作業が途中で止まり満足には進めることができないという困難がありました。その後、スタジオを完成させ、今では渡部さんと仲間の方々がイベントを開催し、新しいコミュニティの交流の場となっているそうです。地元の方々に加え、移住してきた方々とともに暮らしていく上で渡部さんたちが作る輪は重要なものであると感じました。

帰宅困難区域で見た、震災当時の様子

2日目は大熊未来塾の木村さんにご自宅がある中間貯蔵施設内を案内していただきました。中間貯蔵施設内は帰宅困難区域であるため、ほとんど震災当時のままの状態でした。熊町小学



熊町小学校



大熊未来塾 木村さん

大悲山の大杉



大蛇伝説



は深まり紅葉の木を蝕むほど植物が生い茂っていました。私たちが訪れたときには紅葉にツタが這っていましたが、地域のシンボルの存在である紅葉を大切にしたいという地元の方々の思いにより、一度紅葉周辺の草刈りが行われたそうです。原発事故発生後、地域の人々がバラバラに避難し再び帰ってきてもあり交流がなかった中で、紅葉を通じた地域の人々の交流が生まれたことは大きな意味があると思います。

繰り返してはならない原発事故

校には津波は到達していないため、教室の黒板には日直の記録などが、机には国語辞典やランドセルがあり、津波で壁や机ごと流された請戸小学校と比較しても現在でも問題なく過ごすことができるように見えます。しかしながら、目に見えない高い放射線量により小学生が通うには非常に危険な場所になっています。

記憶や教訓のために 震災遺構の意義

熊町小学校は原子力災害の震災遺構として、後世に残していく話が以前からありますが、現

在、取り壊す意見も挙がっているそうです。私は、原発事故を繰り返さないため、歴史を学んでいくためにも熊町小学校を残していくべきだと考えます。原発事故が与える影響についてインターネットなどで知るだけでなく、実際に目で見て感じることでより現実味、自分事という意識を持つて考えることができると思います。

また、熊町小学校の近くにある幼稚園には地域の人々に世代を超えて親しまれてきた大きな紅葉の木が生えています。放射線量が高いことで人は住むことができなかったのとは反対に、自然

木村さんの次女の汐風(ゆうな)ちゃんは東日本大震災で亡くなられ、現在でも発見されているのは一部の遺骨のみです。そのため、木村さんは定期的に搜索活動をボランティアの方々と共に行っていらっしやいます。発災後、木村さんの自宅周辺を見回っていた消防団の方の中に人の声を聞いた方がいたそうです。しかしながら、木村さんはもちろん消防団の方々も原発事故により避難指示が出て、十分に搜索できない状況でした。もし、地震と津波だけであつたら、木村さんはご家族をもっと探せたかもしれない、原発事故さえ起こらなければ救えた命がもっとあつ

たかもしれない、そう思うと人災と言える原発事故は防がなければならなかった、もう二度と繰り返してはいけないことだと思います。

私たちは原発事故について学ぶと同時に、家族や近隣の方々と災害が発生した時にどうするかを話し合い、防災対策に取り組んでいくことが必要だと感じます。また、電気に限らず私たちの身近にあふれている便利なものについて、ただ享受するだけでなくそれらが抱える負の側面についても改めて考えていくことが求められると思います。

人々が大切にしてきた土地や暮らしが

復興のために失われる

3日目には写真家で「おれたちの伝承館」館長をされている中筋さんにアテンドしていただきました。小高区にある大悲山の石仏は東北地方で最大・最古で国指定史跡となっています。加えて、樹齢1000年といわれる大悲山大杉や大蛇伝説などもあり、神山として地域の人々に大切にされている場所です。しかしながら、大悲山の裏に回ると防潮堤などに使われるため山が切り崩されてしまいました。復興のためにもともと大切にされてきた土地・環境を壊している現状

に、本来の意味で地域を守り大切にしているとはいえないと感じました。

原発事故で安全に住めなくなっただけでなく、復興のために地域環境の破壊が行われ、犠牲になっている現状は矛盾していると思います。このように、神山以外にも削られている山は多く、中には鉄塔の下が削られている場所もあったことから原発事故の要因である外部電源喪失が再び発生してしまう危険性も考えられます。

また、原発事故から再生可能エネルギーへとシフトしている動きも見せています。ソーラーパネルに関しては、草刈りが間に合っておらず除草剤が使われているようであることから、放射能の次は除草剤の公害問題が危惧されます。

これらのことから、東日本大震災から14年、復興のために新たな問題が発生している現状に、復興とは何かを考えさせられます。

日々の放射線量の記録から見えること

除染後も高い線量を示す場所がある

最後に、飯館村の伊藤さんと元新聞記者の小林さんから、飯館村の現状や行われている活動についてお聞きしました。

伊藤さんは放射線量を日々記録されています。飯館村の比曽十字路は自然の営みによって、雨が降るたびに放射能が流れ、溜まることで放射線量が高くなっています。このような現象は、比曽十字路以外にも多くの場所で発生していると考えられるが、一度除染した後、再び除染することは基本的にないため、知らない間に放射線量が高い場所で生活している可能性は十分あり得ると考えられます。

放射線について考える際には、「放射線防護の三原則」を理解することも大切です。放射線防護の三原則は正当化、最適化、線量限度からなり、正当化では医療など放射線を使用する行為は、それによって得られる便益が不利益を上回る場合にのみ認められます。また、Clearance level(クリアランス レベル)といって原発構内では汚染された作業着など100 Bq/kg以上は厳格に管理されているのに対して、原発構外は8000 Bq/kg以上という大幅に緩和された制限基準が設けられていることは、疑問を抱かずにはいられません。

原発や放射線、被曝のリスクについて自ら知ろうとしない限り知ることができないのが現状だと思います。しかしながら、私たちもいつ原発事

故の脅威にさらされるかわからない状況にあるため、正しく学び、改めて原発について考えることが重要だと思います。

利便性を享受するだけでなく

その裏側にあるリスクにも目を向け、考える

小林さんからは、原発誘致が行われていた当時のお話をお聞きました。小林さんは当時中学1年生頃で原発PR映画を見たそうです。しかしながら、その場では明るい未来のみが語られ、公害などのリスクに関する話はなく、アンケート



伊藤さんと小林さん

に書いて説明を求めても結局何も話はなかったそうです。それから原発はずっと心の中にあつたが、事故前に津波の伝承などを調べることでできなければ、原発を止めることはできなくとも今が何か変わっていたかもしれないという思いから、原発に関する調査を進め、発信する活動を行われています。

先述したように、原発や放射線のリスクについて学校で教えてくれるわけではないことから、表面的なことだけ知り受け入れるだけでなく、疑問を持ち自ら学んでいくことが大切だと考えます。このことは、原発だけでなくすべての事柄に対して重要な姿勢だと思います。

今回の福島訪問を通して、原発事故が地域に与える影響は放射線の被害だけでなく、地元の方々が大切にしてきたものが望まない形で変えられてしまうといった問題がありました。福島の実状から私たちの生活を改めて振り返るとともに、原発が抱える様々なリスクについて考え自分事として捉えていく必要があると思います。また、自分だけでなく家族や友人などにも福島の実状や原発のリスクについての情報共有を行い、ともに考え、防災などできることから取り組んでいきます。

◇ お知らせ ◇ 2026年度通常総会を開催します

2025年度の事業報告や決算報告等について議決をおこなう年次総会を開催します。総会の議決権を有する正会員でない方もオブザーバーとしてご参加いただけます。お気軽に事務局までお問い合わせください。

日時 2026年2月14日(土) 16:00 ~ 17:00 ※予定

会場 チェルノブイリ医療支援ネットワーク事務所

(福岡市博多区博多駅前3-6-1 小森ビル4A)

* 事業報告・決算報告資料は総会後にウェブサイトにて公開予定です *

復興の在り方を考える

古賀乙羽（大学3年）

より深い学びと体験を得た2回目の訪問

私は今回二度目の訪問となりました。半年ぶりの訪問となり、再び新たな学びを得る機会を設けてくださったことに感謝の想いです。新しくスーパーマーケットやドラッグストアが建てられたり、近年中の完成を目指している復興祈念公園もあったりと少しずつ復興が進んでいるように感じました。

前回の訪問では、ただただ災害がもたらした町の現状に衝撃が大きく、より原発のことについて

深く知ることができず無念でした。原発に対して無知な自分だからこそ、一から時間をかけて深く学んで、知っていこうと思います。今回も多くの方から貴重なお話や体験をさせていただきました。

新たなコミュニティスペース

東日本大震災後に造られた木造仮設住宅を再利用した「STUDIO B-6」という場所が浪江町にあります。事務所Fimstudioの渡部

昌治さん（以下、渡部さん）が震災後、長い間空き家となっていた仮設住宅をどうか活用できないかと考えた結果、造られたのが「STUDIO B-6」です。シェアキッチン、カフェスペース、書店、事務所が一体化した場所となっており、地域の人々の交流の場として活用されています。木材の暖かな温もりのある空間で、近所であれば通いたくなるような場所でした。様々な復興の形がある中で、再活用とい



「古今呂の宿 福とみ」でご馳走になった夕食

う面と人々の交流できる場所という面はなかなか無いように思います。移住者の方々も増えてきていますが、震災前に比べるとまだ居住者数は少ないそうです。移住してきても馴染めない・居場所が無いという問題もあります。そのためには、誰でも気軽に訪れられる居場所が必要です。そのような場所になれば、とのことでした。

夫婦での夢の実現

また、今回初めて農家民宿「古今呂の宿 福とみ」さんにて宿泊し、人の繋がりを感じました。



Fimstudio外観

夕食では、飯館村生まれのかぼちゃ「いいたて雪つ娘」を使ったお料理を中心に、季節の食材をふんだんに使用したお料理に感動しました。オーナーの渡邊とみ子さんからはいろいろなお話をお伺いできました。震災後の苦悩や挫折から、人との協力を経た成果などお話しただきました。どのような状況下でも心の支えとなった亡き夫・福夫さんの存在の偉大さに感銘を受けました。2024年に民宿としてオープンし、福夫さんの夢が実現しました。民宿ならではの親しみやすさが人との繋がりを強く感じられると思います。

震災で人々は多くのものを失いました。かつて居た場所に「生きた証」を残すことに価値があるのではないのでしょうか。そのことについて考えさせられたのが中間貯蔵エリアです。

中間貯蔵エリアでの見学

大熊未来塾代表の木村紀夫さん（以下、木村さん）に中間貯蔵エリアの案内をしていただきました。線量が高いため、大学生ボランティアは防護服を着用して見学しました。

エリア内は、まるで14年前から時間が止まったような感覚になる場面を多く感じました。木村さ

んの亡き娘の次女・夕風（ゆうな）さんがかつて通っていた熊町小学校は机上に物が散乱し、当時の緊迫感が伝わってきました。また、栽培漁業センターは津波で建物が崩壊し、ボロボロの状態が残っていました。

このような中間貯蔵エリア内建物の今後を巡って、行政と地元の方で意見の相違が起きているのが現状です。例えば、熊町小学校は保存方法としてVRで残す策が出ているそうです。このことを聞いて衝撃でした。裏を見れば、遺構として残したくない。行政にとって都合の悪い場所ということです。過去をもみ消すことで復興を謳っているように感じました。震災当時のまま遺構にすることは、当時の状況を知り、そこから学ぶ機会を得るだけでなく、そこで「生きた証」を残すことができます。そのために、残さざるを得ない状況を作ることが大事です。

福島県外での除染土の処分について

今回の訪問で、除染土の行方に関心を持ちました。除染土の最終処分は、2045年までに福島県外での処分が法律で定められています。国全体で背負うべき課題ではあります。ですが、放射線測量家の伊藤延由さんによると、福島県外で

木村さんによる中間貯蔵エリア案内



写真で説明を受けている様子

福島県復興祈念公園計画とその完成予定地
(双葉町産業交流センター屋上から)



の処分にはリスクがあるそうです。除染土を埋め立てることで、何らかの不手際で掘り返さないか・自然災害で土が流れ出ないか、ということです。だからこそ、福島県で一か所に集めてリスクの削減をすべきだと仰いました。

今回の訪問でも多くのフレコンバッグが山積みになっている光景を目にしました。果たして、これらすべてを問題なく運ぶことができるのかという疑問があります。放射線は目に見えないからこそ、いっどこで問題が発生するのか分かりません。県外のあちこちに埋め立てられて、原発に対して知識の無い人がいた場合のリスクなど不安な要素はいくつもあります。例えば、被ばくすることでのがんのリスクがあるなど、国は被ばくリスクを国民に周知させていません。この問題はずっと前からあります。私たちは無知のままでいいのでしょうか。

開発の進む浪江町を見て感じたこと

また、中筋さんの案内で浪江町を訪れた際に、前回よりもさらに復興への準備が進んでいるように感じました。浪江駅周辺のグランドデザイン計画や、F・R・A・Y(エフレイ、福島国際研究機構)による大学建設に向けての工事など、どんど

ん開発が進んでいました。外側だけ見れば、町の活性化になっていると感じます。また、「脱炭素社会」として、グリーン水素(再生エネルギーを使って、CO₂を排出せずに作られた水素)を軸にしたまちづくりを目指しています。エネルギーの地産地消でエコ化を促進しているそうです。

都市開発で最も大切なことは、震災前の思い出や景色が一変しないことです。中間貯蔵エリアでは、もともと存在したものを壊して、新たなものに変える計画があります。この計画は、今一度見直す必要があると思います。

原発は戦争とは違い目に見えないからこそ世間的に重大視されていないのかもしれませんが。エ



浪江駅周辺デザイン計画

ネルギーの町としての誇りだと語る人もいます
が、悪く言えば「国に良いように利用されている」
というのが現実です。災害があってもなお、発電
所は多く残っているのが今の日本の現実です。

世の中は進化しつづけ、昔に比べてはるかに便
利になりました。ですが、便利と引き換えに多く
の危険を抱えているという危機感を再認識する
必要があります。そして、汚染廃棄物処理問題
など今一度、多くの人に興味・関心を持ってい
てほしいなと思います。年月が経つほどと人々の
記憶は無くなつていきます。だからこそ私たちの
ような若い世代が積極的に関心を持つべきでは
ないでしょうか。私自身にできることは限られて
いると思いますが、今後また訪問等を通して、
原発を始めとした様々な問題について積極的に
考えていきたいです。



理事長・寺嶋可南子逝去のご報告

去る2025年9月2日、当法人理事長 寺嶋可南子が病氣
のため享年34歳にて永眠いたしました。

生前のご厚誼に深く感謝し、ご冥福をお祈りするとともに、
謹んでご報告申し上げます。

寺嶋可南子さんと当法人の関わりは、彼
女が大学2年生の時に受講したNGO福岡
ネットワーク主催の「NGOカレッジ」の
体験プログラムとして、2011年1月～
3月までの3か月間、私たちの活動に参加
してくれたことがきっかけです。

その後もボランティアとしてチエルノブ
イリ通信の発送作業やイベントのスタッフ
として参加し、活躍してくれました。

活動に慣れた2012年、2013年に
はベラルーシ共和国訪問へ同行し、ブレス
ト州立内分秘診療所などの関係機関を訪
れ、私たちの大事な活動を体験することに
なりました。そして2018年3月からは
理事長として活躍してくれました。また、
実務面でも、チエルノブイリ通信の編集や
発送までの各種作業、ウェブサイト管理な
ど多種多様な役割を担ってくれました。

2021年3月には
福島を訪問。浜通りを
中心に現地の様子を確
認し、以後、現在まで
の11回に渡る訪問の基
礎をつくりました。

今年の春には私に「福島に行きたい」と
言いました。体調が良ければ、また福島や
ベラルーシに行きたかったのではないで
しょうか。彼女のお母さんからは「チエル
ノブイリ医療支援ネットワークの活動をラ
イフワークにすると常々言っていました」と
伺いました。

早すぎる死が残念で仕方ありません。彼
女に会ったときに褒めてもらえるように、
努力を積み重ねます。そして山田英雄さん
と3人でゆっくり話すつもりです。

川原秀之



写真から福島を知る(6)



まだまだ知らない 福島を知る!!

2025年秋

通算8度目となった福島訪問(2025.9.7～9.11)でみたこと、かんじたことを、写真と文章でお伝えします。



【写真上】福島第二原発近くにある富岡漁港から早朝の太平洋を望む
【写真左】富岡漁港近くの民宿・フキノトウ

今回の訪問で撮影した写真は、
こちらからご覧いただけます。



▲ 熊町小学校の教室は3.11のまま【大熊町】 大熊町立熊町小学校(現在閉校)は、3.11当日のまま。ここで木村さんご家族の3.11当日の様子を克明に伺った(自宅は流され、父と妻、次女が亡くなった。自宅は現在、中間貯蔵施設内となっている)。熊町小学校は、遺構として残す動きもあるようで、今後にも注目だ。



▲ 「2045年にこの土地へ戻る」という思いを伺う【大熊町】

大熊未来塾代表木村紀夫さんの案内で、中間貯蔵施設内を見学。「施設が県外に移設されるだろう2045年に自分たちは戻ってくる」という思いを自宅があった場所に石碑(写真)を建立したという町民の方のお話を伺いました。



▲ ドローン操縦・写真撮影に学生もチャレンジ！【双葉町】

3度目のドローン登場となった今回の訪問ですが、今回は大学生にも操縦と写真撮影にチャレンジしてもらいました。最初は少々緊張した面持ちでしたが、上空からみる立体感を堪能したようで、夢中になって操縦していました。写真もバッチリでした(上の写真)。

ドローン操縦・写真撮影協力:中筋 純



▲ 津波の威力を改めて知る【富岡町】

富岡漁港近くにポツンとあるブランコ近くに最近できた案内図(上の写真)をなにげなくみた。眼下に広がる海辺や海岸線は、3.11以降のものであり、それ以前とは違うことに気付かされた。案内図にある2枚の写真は、改めてあの日この地を襲った津波の威力を、今に伝えている。

同行者プロフィール



せりたひろし
広告デザイナー

NPOやNGO、社会福祉協議会など非営利組織の広報ツール製作を多く手掛ける。

現在、京都芸術大学通信教育部デザイン科イラストレーションコース在学中。「訪問する度に、体重の増加傾向が止められず。福島食材は、どれも美味しいので、毎回ヤバイですねー」



公式インスタ

2025年春

同行してみて

今回の訪問は、最初の訪問から熱望していた木村紀夫さんに案内をようやくお願いできました。

中間貯蔵施設内に自宅があるという木村さんは、これまで福島で聞いてきた話のいわば集大成のような感じがして、大きく心に響きました。さらに水俣や広島、沖縄にも関連づけてお話が伺えたことで、福島の現状や今後が過去に起きた出来事と変わらないことも、残念ながら明確になってきました。

それから、木村さんは「チッソは私であった」といった水俣の緒方正人さんと、どこか似ている気がしました。実に物事に向き合う姿勢が似ているかも。九州では今まであまり話したことがないので、次はこっち(九州)では是非機会を設けたいものです。



福島訪問を振り返る (5)

2021年に開始した福島訪問も11回目となり、延べ27名（実数13名）の大学生が訪問に参加しました。これまでの訪問で特に印象に残っている写真とその理由を参加者に伺いました。



帰還困難区域の通行止め地点

2023年3月1日 飯舘村長泥地区

区域内には今でも震災当時のままのお店や家がたくさん残っていて、ここだけ時間の流れが止まっているようで、どこか現実とは思えない異様な雰囲気でした。



除染土の土壌貯蔵施設（中間貯蔵施設内）

2023年3月3日 双葉郡大熊町

ここで貯蔵された除染土は、2045年までに福島県外で最終処分することが決まっています。しかし、最終処分場所は決まっていません。この問題は福島県だけの問題ではありません。



ご支援・ご協力をありがとうございます！

古本募金

きしゃぽん

《 これまでにお寄せいただいた寄付額 》

1,435,858円(500名)

読み終えた本やCDなどで募金ができる「古本募金きしゃぽん」を通じて、
たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！



あなたのご自宅や職場に眠るお宝が

チェルノブイリ支援につながります

本



CD



DVD



ゲーム



貴金属



ブランド品



その他、懐かしのおもちゃ、ブリキ玩具(昭和40年代以前のもの)、フィギュア、プラモデル、鉄道模型、洋酒、テレホンカード、商品券、切手、ハガキ、年賀状、カメラレンズ、模型、絵画、万年筆など…

たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計

*活動支援金	395,302円
*のぞみ21カンパ	288,802円
*雪だるま3号カンパ	3,000円
*東日本支援カンパ	0円
*おまかせカンパ	40,000円
*福島訪問カレンダー	37,000円
*福島訪問の交通費一部	500円
*福島県産米10キロ	6,000円
*あじさいの会	12,000円
	8,000円

(2025年8月～2025年10月分の寄付内訳)

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。
います。皆さまよりお預かりしたご寄付は、チェル
ノブイリ被災者医療支援、福祉工房「のぞみ21」支
援、東日本大震災被災者支援、事務費用等にあて
させていただきます。

※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、
ご紹介しております。

●口座受付寄付

*伊藤金光 榎本みつ枝 金山涼子 神陽子 里見照
子 渋谷けい子 高嶋幸雄 佃あけみ 古本募金き

しゃぼん(運営:嵯峨野株式会社) 村下範子 山田
秀子 和田由理

〔都道府県別〕

【東京都】1名 【栃木県】1名 【静岡県】1名
【兵庫県】1名 【愛媛県】1名 【鳥取県】1名
【島根県】1名 【広島県】3名 【山口県】3名
【福岡県】19名 【熊本県】3名 【大分県】1名
【鹿児島県】2名

計37名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリースポータの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田
照子 井上礼子 内野千鶴子 延壽富美 大麻卓子
大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子
片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上
雅夫 川崎君子 川尻愛子 倉掛大輔 古賀輝洋 古
賀尚子 財津耐代子 財津悠子 齊藤美代子 阪口
香奈子 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵
子 末永浩子 高山知佐子 竹田恵子 田中京子 珍
部千鳥土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富永隆史
鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島
まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣
福井初子 福本勅子 藤本孝子 古川恵子 松尾智
恵子 松永庸子 丸山子より 水本敬子 宮野義治
村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山本亮輔 吉田
美抄子 渡邊久美子

計94名(匿名含む)

編集後記

10月中旬になると朝晩が涼しくなりました。過
ごしやすくなり鈍っていた活動も徐々にアップして
ます。朝見る夜空は星がとても綺麗ですが、今年
の一番の景色はミンスクで見たブルーモーメントで
した。また見れるといいな！(H・K)

チェルノブイリ通信のペーパーレス化を進めています

環境負荷軽減および経費削減のためペーパーレ
ス化を進めています。団体ウェブサイトでの閲覧
へ変更していただける方は大変お手数ですが、
メールやお電話等で事務局までお名前とご住所
をお知らせください。

TEL/FAX : 092-260-3989
E-mail : jim@cher9.org

横書きのウェブ版
できました！



また、会報発行のお知らせメールをご希望される方は合わせてメールアドレスも
お知らせください。皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。